第４章　差をつける表現編

英語をたくさん読んでいる人間には、辞書にはっきりと載っていないようなことでも経験則で自然とわかっている事柄というものがある。そのような表現が英作文においても使用できたら、一級上の評価の高い答案になることは間違いない。例えば、**what ～ is all about** や **what ～ have to say** などがそうである。

また、ありふれた表現でも、読解の際に決まり文句や公式として認識していないために、見過ごしてしまっている表現というものがある。**there is something 形容詞 about ～** や **there is more to ～ than ...** などは全てが基本単語で構成されているために決まり文句として暗記するという態勢にならないようである。しかし、こうした表現を多用することで、例えば「何とも言えない味わいがある」(§56) の「味わい」の部分をどう訳出するか (flavor や taste は不可) とか、「究極の意味」(§57) を ultimate significance というかたい抽象名詞を用いるよりも汎用性の高い口語体で表現することができる。

そして、基本単語でもちょっとした語法を知っているだけで、格段と英語らしくなるものもある。**first** という語を副詞で用いるのは、列挙して物事を論じる場合 (First, ～. Second, ～. Finally, ～. など) ならよいが、日本語の「まず」に相当する語は副詞の first よりも、**the first thing (that) SV～**と表すとそれらしく聞こえる。surprised の語法も〈be surprised at ＋抽象名詞〉ではなく〈**be surprised at how ＋形容詞［副詞］＋ SV～**〉とすると、ネイティヴスピーカーには自然な英文に見え、日本人の先生には日頃から英語学習に余念がない多読している学習者の作文だという印象を与えられるものと思う。

この章では、**他の英作文の指導書ではあまり力を入れて扱っていない、何気ないところで自然な英語に聞こえるような表現や公式**を集めてみた。京大の問題ではそのような表現が特に功を奏すので、どういった場面でそういう発想に変えるのかを確認していただきたい。